おとうと ⑶

（小学五年生の「少年」は、目の手術を控えている弟のアツシに海を見せるため、山の中腹にある商工会館にやってきました。）

階段を上った。転んだときのためにアツシの後ろに回った少年は、①「手すり、ちゃんと持ってるか」と何度も声をかけた。階段の段差はけっこうあって、まだ小さなアツシは、一段ずつ踏ん張らないと上れない。でも、それがかえってよかったのか、アツシは一度もけつまずくことなく、よいしょ、よいしょ、と上っていった。

三階から四階に上る途中で、まわりの建物の高さを超えて、視界が開けた。

「アッくん、海、あっちだから」

少年が指差す方向に目をやったアツシは、途方に暮れた顔で「どこぉ……？」と訊いた。

「もっと先だよ、ずーっと先のほう」

見えるのだ。ビルや家の建ち並ぶ街を越えたずっと先に、空よりも微妙にまぶしい、コンタクトレンズのような形の入り江が小さく見える。間違いない。あれは海だ。

檻の鉄格子をつかむ動物園のゴリラみたいに、アツシはしばらく黙って柵に顔を張りつかせた。

カウントダウンは十。少年はそう決めた。十数えても海を見つけられなかったら、もっと上まで行けばいい。②このビルは六階建てだから、どこかで海を見つけられる。絶対にだいじょうぶ。自分に言い聞かせて、いーち、にーい、と数えはじめて……なな、で終わった。

「わかった！　見えた！」

アツシの歓声が、鉄の階段にキンと響いた。

二人はしばらく黙って、街と、空と、海を眺めた。ときどき顔を見合わせて、アツシはうれしそうに、少年は照れくさそうに、笑った。アツシのほうが階段の上の段にいるので二人の顔の高さはほとんど同じで、正面から見るときにはアツシのメガネの渦もそれほど目立たないんだな、と少年は気づいた。

「夏休みになったら、ほんとに海に行こう」

少年が言うと、アツシは「泳げる？」と訊いた。

「泳げるし、お母さんに水中メガネ買ってもらって、もぐって遊ぼう」

「お魚、見える？」

③少年は息をすうっと吸い込んで、「アッくんの目が良くなったら、見えるよ」と言った。「だから見えるんだよ、絶対、百パーセント」

「……ほんと？」

「信じろよ、ばーか。文句言ってたら置いて帰るぞ」

胸につっかえていたものが、とれた。アツシもなんだかほっとしたように、えへへっ、と笑った。

（重松清『小学五年生』文藝春秋　所収「おとうと」による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「『手すり、ちゃんと持ってるか』と何度も声をかけた」とあるが、このときの「少年」の様子として、適当なものを選びなさい。

ア まだ小さくて聞き分けがないアツシにいらだち、口うるさく注意している。

イ 目が良くないアツシが階段で転ばないよう気にかけ、支えようとしている。

ウ 早く階段を上ってアツシに海を見せたいと思い、何度もアツシをせかしている。

(2) ――線②「このビルは六階建てだから、どこかで海を見つけられる」とあるが、このときの「少年」の様子として最も適当なものを選びなさい。

ア アツシがなかなか海を見つけられず、焦(あせ)りを感じている。

イ いつかは海が見えるはずなので、気楽にかまえている。

ウ 必ず海が見つけられると、願うように信じている。

(3) ――線③「少年は息をすうっと吸い込んで」とあるが、このときの「少年」の様子として、適当なものを選びなさい。

ア 思いがけない問いかけから自分の心配が杞憂(きゆう)だったことに気づき、拍子抜け(ひょうしぬ)している。

イ アツシの目が良くなることを信じ、アツシにもそう信じてほしいと強く感じている。

ウ 何とか本心をとりつくろい、アツシに不安を感じさせないように接している。